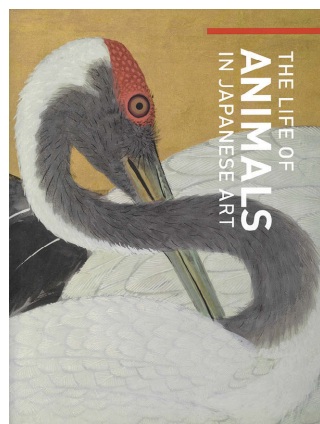


ロバート・T・シンガー、河合正朝編

『日本美術に見る動物の姿』

Robert T. Singer and Kawai Masatomo, eds. *The Life of Animals in Japanese Art*

白石恵理



Princeton University Press, 2019

なぜ、私たちはこんなにも動物が好きなのだろう。ちなみに、評者は猫に目がない。いや、なかには特定の生き物は嫌い、苦手という人も多いが、とりあえず日常は動物であふれている。自然界では生態系破壊が深刻化する一方で、マンガやアニメ、ゲームのキャラクター、ぬいぐるみ、マスコット、アクセサリ、食器や衣類や文具・雑貨の模様、イラスト、菓子のに形にいたるまで、世の中は哺乳類・鳥類・魚類・爬虫類ほか想像上の生き物を含め、さまざまな動物の表象で埋め尽くされている。先端技術を駆使したロボットさえ、多くが既存の動物型である。本書がいうには、特に日本ほど、長きにわたり動物の描写に対して情熱を傾けてきた国はないと思う。

紹介のタイミングをやや逸してしまった感はあるが、新型コロ

ナウイルスが世界を覆う直前の二〇一九年、アメリカで、*The Life of Animals in Japanese Art*（日本美術に見る動物の姿）と題する大規模な日本美術展が開催された。国際交流基金が共催し、東京国立博物館協力のもと、日米の専門家チームが企画構成に参画して、首都ワシントンのナショナルギャラリー（National Gallery of Art）とロサンゼルス・カウンティ美術館（Los Angeles County Museum of Art）の二か所を巡回している。本書はその図録だが、四四四ページ、オールカラー、厚さ三・五センチの大型ハードカバーで、どちらかといえば図鑑の態である。表紙は布張りで箔押しという贅沢な装丁は、おそらく大学や公共図書館での未長い利用を前提に編さんされたものだろう。

動物をテーマにした展示自体は、日本内外でよく見られるが、

五世紀から現代までの千六百年という長いスパンで、日本の芸術作品から動物の表象だけに焦点を絞った展覧会の開催は、米国では初めてという。編者の一人である河合正朝は序文で、「日本美術に見える自然との関係性や動物への畏敬の念は、ヨーロッパや中国のそれとは異なる」と述べる。ヨーロッパの美術では、人体が最高の美とされ、中国美術では、壮大な自然を描く風景画が最も尊ばれるのに対し、日本美術では、「自然と一体となった動物や植物が、一般に人間との関係性のなかで描かれる」。そして、「人間と動植物の有益な共生という理想的な関係性こそが、日本美術を理解するうえで鍵となる要素の一つ」だと説く。日本美術と動物といえば、従来、中国を起源とする「花鳥画」の系譜が語られがちだった路線とは異なるコンセプトが、ここでは提示されている。本書（すなわち本展）の特徴は何といっても、幅広い作品の選定と、時代やジャンルを越えたユニークな配列にある。取り上げる作家は、室町期以降だと雪村周継、伊藤若冲、円山応挙、長澤蘆雪、葛飾北斎、歌川広重、歌川国芳から、岡本太郎、草間彌生、三宅一生、森山大道、奈良美智、村上隆、束芋^{たばいも}、チームラボまで。ジャンルも、彫刻・絵画・漆芸・陶芸・金工・織物・版画・写真・服飾など多岐にわたる。約三百点の出品作のうち、日本の所蔵品は半数を超える約百八十点で、その多くが国外では初出展となった。

図版のトップページがまず意表を突く。登場するのは、赤・緑・黄色をベースにおなじみの水玉模様を配した、草間彌生作の三体の犬のオブジェである。そしてそのページをめくると、今度は古墳時代の埴輪の犬が出現し、嫌が応にも両者を対比せずにはいられない。参考までに展覧会の紹介動画を見ると、会場一室の中央に、三宅一生デザインの動植物をモチーフとしたプリント作品を着たマネキンが屹立し、その周囲を江戸期の画人・曾我蕭白の「群仙図屏風」に想を得た村上隆の極彩色のアクリル作品が華やかに取り巻いている。このように自由な発想の展示デザインは近年、日本国内の展覧会でも見られるようになってきた。「日本美術史」の扱う範疇も語り方も新たな時代に入ってきており、本展もその一つといえるだろう。他方、「動物と古代の有力者」に始まり、「十二支の動物たち」「日本仏教における動物」「禅の世界」「神道における動物」「吉祥動物」「日本絵画における動物の起源」「武士と動物」「動物と装飾芸術」「動物と四季」と、各展示コーナーのテーマはいたって教科書的で、日本美術の初学者にとつては便利なガイドブックともなっている。一点一点の図版が高精細で美しく、拡大画像が多いのも魅力だ。

展示全体に占める着物と工芸品の数の多さは、アメリカでの鑑賞者の関心がそれだけ高いことの表れだろうか。着物は小袖、振袖、打掛、歌舞伎衣装を含め約三十点がそれぞれの色・文様とも

に詳細に紹介されている。特に、吉祥文である鶴と亀の艶やかな刺繍が強調されているのが印象的だ。それと同時に目を引くのは、印籠や根付など細工物の美しさである。拡大画像によつて、会場で実物を見るごとく、色や質感をじっくり鑑賞できる。たとえば、金銀の蒔絵で「狐の嫁入り」図が精巧に描かれた江戸期の印籠（メトロポリタン美術館蔵）や、象と天狗がお互いの長い鼻を綱で引き合うレリーフを金銀・色絵で施した刀の鏝（明治期、ボストン美術館蔵）などはとりわけ見事である。「象と天狗」とは面白い画題だと思つてみたら、原図の作者は幕末の浮世絵師・河鍋暁斎ということがわかり、これもうれしい発見だった。

本書にはほかに、近年の復刊により再注目されている一九六〇年代の二冊、『日本再発見 芸術風土記』と『神秘日本』所収の岡本太郎撮影によるナマハゲ等の記録写真や、据え置きカメラによつて野生動物のリアルな生態をとらえた宮崎学の作品が収録されていることも付記しておきたい。最後に、一つだけ残念な点としては、巻末の「参考文献」(Further Reading) について。挙げられている四十冊余りのうち、日本で出版された書籍は『クサマトリックス 草間彌生』展図録(森美術館・札幌芸術の森、二〇〇四年)のみで、ほかはすべて英語文献である。英語圏の読者対象とはいえ、日本の美術史家も企画に加わったこの機会に、ぜひ日本国内の豊富な成果から、もう少し取り上げてほしかった。言語に関する

壁の厚さをここでも痛感する。

繰り返すが、本書の図版は極めて高精細で美しく、拡大画像により作品の隅々まで鑑賞することができる。また、コロナ禍にあつて画像のデジタル化はさらに進み、世界中の芸術作品がいつでも手軽に自宅で楽しめるようにもなった。なのに、美術鑑賞の醍醐味は、やはり実物と直接対話するに尽きる、という感をいつそう深くするこの頃である。今回のような美術を通じた民間交流が再び盛んになる日が待ち遠しい。